

中村素堂

これは技術としての表現はたしかに現代環境との違和を補って立派であるが、まだ完全に短歌の表現技法としてマッチしているか否かの文学的理解については手がまわり兼ねている人も多い現状で、あと十余年もの日時をかせげば、あるいは現代短歌表現の仮名の書の美も出てくるのではないかと思うが、これは歌人の方の側から出てくるのではなくて、書くという芸術だけを主とする側からだけで、おそらくは書写の一般性とはならないかも知れない。

こんな風に随分乱暴な話を申してきて恐縮ですが、これは短歌人の神経から見ても、今日のこの活字で組まれた自作があれば十分満足な表現に達したものであるとは思っていない人々もあるのではなからうか。たとえば大分遠い日のことではあるが、今は九十を超えられた土岐善麿先生、またその親しい知友であったという石川啄木氏などは、むかし一首五句で後世の短歌を活字で五行に割って組み、一首三十一字を一行に組まれなかった時代もある。いまそれを読み返してみると、何か一種の変わった韻致を感じさせられるのは私だけだろうか。時代を少し下げて、早稲田の会津八一先生の総ひら仮名組みの『鹿鳴集』その他を読んでもみると、これは歌風との関係もあつてか、いかにも呼吸の長い調べを伴ったものが感じられる。

同じ活字でも、一頁に一首きりの歌集、活字箱のようにぎっしり入れた文庫本式の歌集、また上寄りに二首くらいを一頁にやや大きめの活字で組んだもの、みなそれぞれの風格が出ている。

これらの作者たちは今の活字組みのものでも、何か視覚に戀える短歌独自のものをと探って腐心されていられるのではなからうか。今日そんな風習は少なくなっているようであるけれど、特定の個人にあてて短歌を贈る時など、どんな風にしておられるか知りたいものである。原稿用紙のままであろうか、レターペーパーであろうか、あるいは本格的に敷紙、短冊とゆくか、そしてそれらの文字は

どんな風に書かれるか、この活字文化の行きわたった中で自作自書という場合の型はどうであろうかと思つて大いに関心を持つてゐる。数年前完結した角川書店刊行の『近代文学全集』の月報に、初めての試みとしてその文学著者の真蹟を必ず一葉掲載し、ごく簡単な解説みたいなのを担当したが、その全集に収載された作者たちは、たしか戦前物故ぐらいであつたと思うが、かなりわが儘なものもあつても、多くはまだ毛筆書で、伝統性の中に入るものばかりだつた。まだ半世紀も経つていないのに、文学人の氣質も教養も相当変わりつつあるようである。

短歌の世界の人々も、活字によるもの以外、もう作者が自作自書で鑑賞に供する場もなくなり、またその習慣ももう過去のものとなつたかに見え、すなわち短歌もまた書くという技術の世界とは完全に訣別して読む鑑賞だけで見える鑑賞ではなくなつた。

ただ、やや老境といわれる歌壇の人々に出会うと、どこかまだ短冊一枚でも書いて見せたい——といった一縷の未練を持つてゐるらしいと見るのは、もうひとつの偏見だらうか。

まあこう勝手なことを喋つてきて、ふと思いつくのは歌人はみんな書が駄目になつたと評し切つたのでもなく、書家はまたことごとく詩情歌意と無縁に書きなぐつてゐる人ばかりでもない。一括した形でこういう暴言を吐いては大分失礼にあたる向きも少なくないのは万々承知している。歌人で書壇の大家、書道家で短歌壇にも活躍し文名を記されている人も、決してなしとはしないが、今日ほどの世界もこまかく細分化して、あれとこれと兼ね能くするより、一科目に精力を集中する形でなければ、その世界の中で生き延びられないところまできてゐるようだ。

文人世界などと称して瀟洒な生活をした生きざまは地を払つてゆくようだ。

ひとりひとりの濃やかな書写作業が、かつて大きな歌集の編成にひと役かつていた話と思う中に、どこかへそれたようでもある。

『祭墨』